

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	大貫俊彦
論文題目	内田不知庵研究—明治二〇年代前半における批評家内田不知庵の文学活動および文学論に関する研究
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、大学院文学研究科博士課程進学時から申請者が取り組んでいる内田不知庵の文学活動についての研究をまとめたものである。一般的には内田魯庵の名で知られている不知庵だが、明治20年代から昭和初年代にかけて長く活躍したその文学経歴において、主に「不知庵主人」の号で文芸批評を始めてから、明治25年にユニークな文学論『文学一斑』を刊行するまでの時期の文業の詳細は、必ずしも明らかではなかった。申請者はその時期に注目し、内田不知庵の文学思想の根幹を、同時代の文学の動向と関連付けながら考察している。埋もれていた早稲田大学図書館・演劇博物館所蔵の資料に、新たな照明を与えつつ、不知庵の評論を論じたことにより、新しい達成が見られたのも注目に値する。</p> <p>「序章 内田不知庵(魯庵)研究概観および本研究の課題と方法について」では、これまで先人の研究によって魯庵像が作られて来たが、その多くは魯庵自身の回想によっており、正しい魯庵の文業を明らかにしていないとする。正しく評価することにより、初期不知庵時代の文学活動に、更なる評価を与えられると主張する。</p> <p>本論は全11章からなるが、そのテーマから言うと、「文芸批評家内田不知庵の登場について」(第一章)、「初期小説について」(第二章・第三章)、「初期評論・文学観について」(第四章～第六章)、「武蔵屋叢書閣と不知庵について」(第七章・第八章)、「内田不知庵・田辺花圃の往復書簡について」(第九章・第十章)、「『文学一斑』—(ドラマ)論の射程について」(第十一章)の6つの部分に分けられるだろう。以下1章ごとに、成果を概観して行きたい。</p> <p>「第一章 文芸批評家、内田不知庵の「出発」—明治二〇年代初頭の批評言説と批評第一作「山田美妙大人の小説」をめぐって」は、山田美妙個人に宛てた書簡が、一篇の批評としてどう独立したかが辿られている。その文章に見られる多義的な修辞技法の使用に、不知庵の観察眼の卓越性を見ている。</p> <p>「第二章 共鳴する裏屋の響き—内田不知庵「酒鬼」論—」は、小説の代表作『くれの廿八日』に至るまでの道において、最初期の小説がどうであったのかをていねいに辿る。従来注目されて来なかった「酒鬼」をとりあげつつ、都市整備と禁酒運動という世相を絡めて論じ、批評の試みだけでは見えて来ない小説観に触れている。</p> <p>「第三章 内田不知庵「もみぢ狩」論—典拠と小説の構成について」は、作品の典拠が、従来言われている謡曲だけではなく、式亭三馬の作品も取り込んでいることを実証する。更に、小説世界に「悲惨憂愁」の観点を導入したことを論じている。</p> <p>「第四章 「強硬」な不知庵—『浮城物語』論争における内田不知庵の「小説」の保持」は、明治初期の代表的な文学論争である、「文学極衰」論争、『浮城物語』論争を分析した一章である。修士論文で矢野龍溪を扱っていた論者ならではの読みが、よく生かされている。</p> <p>「第五章 「巻を掩ふて嘆ずる」不知庵—明治二三年の書簡からみるドストエフスキー『虐げられた人びと』の読書体験と批評の変化」は、不知庵のドストエフスキー体験を論じた力作で、英語版『虐げられた人びと』を読んで、不知庵の心情がどう揺れ、文学の根本への眼が生まれたかの内実を分析する。</p> <p>「第六章 「三日月」に見出す〈詩〉の材—明治二四年、内田不知庵が村上浪六の登場に見た「小説」の可能性と危惧」は、「詩(ポエトリー)」という概念が、写実の奥にある「文学の真の価値」のことを意味していることを論じて、村上浪六登場時の文学状況に触れている。</p> <p>「第七章 内田不知庵と武蔵屋叢書閣—「武蔵屋本」出版事業と(ドラマ)論」第八章 内田不知庵と武蔵屋本</p>	

『傾城買二筋道』の二章は、出版批評に関係した不知庵が、「ドラマ」という観点から近松の世話浄瑠璃を高く評価していることの意味を論ずる。また、武蔵屋本の一冊である梅暮里谷峨『傾城買二筋道』をめぐって、その「緒言」が不知庵筆と推定し、時代の中で意味付ける。折から、北村透谷の批評活動も絡み合い、現在からみると問題が多い内実が辿られる。

「第九章 田辺花圃あて内田不知庵書簡の再検討—早稲田大学中央図書館蔵三宅花圃書簡との復元へ向けて」と「第一〇章 内田不知庵宛田辺花圃書簡の翻刻と紹介—早稲田大学中央図書館蔵三宅花圃書簡との復元へ向けて(二)」は、資料探索の力が発揮された部分だと言えよう。二人の人の間の違いがよくわかる書簡で、しっかりと論じられたのは手柄である。

「第一章 内田不知庵『文学一斑』論—「道義」の媒介性から捉える〈ドラマ〉論の射程」は、不知庵の言う「ドラマ」を成立させる契機としての「道義」に注目、ヘーゲル美学との関連にも留意し、『文学一斑』の内実にも迫る。論ずるのが難しい一冊だが、どういう論点から構成されているかが明らかになったと言えよう。

最後に置かれた「終章 本研究の成果と課題—「内田不知庵研究」総括」は、これまでの論旨を振り返り、今後への展望を描いた部分であり、これまでの研究成果を確認し、残された部分を論者自身が確認しており、研究への誠実さがうかがえると見えよう。

「不知庵」時代に限定し、対象を絞ったことは賢明だが、結果的にその後の「魯庵」時代とどうつながるのかについての展望が今一つあいまいになったことは否めない。論者の内田魯庵に対する全体像がもっとはっきりしたならば、この時期の研究の意味も更に明らかになったであろうとおしまれる。また、明治二〇年代の文学状況に眼を向ければ、いくつかの課題も出て来よう。同じように小説論・ドラマ論を展開した坪内逍遙との関係に限っても、まだまだ考えてもいい点は多いように思われる。しかし、これまで著作集が刊行され、作品がある程度まとまっていた文学者ではあっても、野村喬氏らわずかな研究者によってしか再評価されなかった内田魯庵の研究に、本論文は確実に進展をもたらしたのは事実であり、その努力は高く評価出来る。資料の発掘においても、研究をリードする成果を挙げている。よって、本論文は、「博士(文学)」の学位を授与するのにふさわしい業績であることを認定する。

公開審査会開催日	2014年1月25日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	中島国彦
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		高橋敏夫
審査委員	早稲田大学政治経済学術院・教授		宗像和重
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	十重田裕一
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	鳥羽耕史